

この海で一番ゴークイな海賊団

木奉 間人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球の平和と人々の笑顔を守り続けたきた、伝説のスーパー戦隊その力を受け継いだのは、とんでもない奴らだった！

世界政府とマリージョアに反旗を翻し、偉大なる航路を駆け巡る

「それが海賊ってもんだろ？」

世界最大のお宝探しで、地球狭しと暴れまくる！

そして、伝説のスーパー戦隊にゴーカイチェンジ！

「派手に行くぜ！」

目次

第1話	赤い狼煙を上げろ	1
第2話	海賊達のデスレース	13
第3話	夜明け、そしてスタート	24
第4話	小さな密航者	32
第5話	嵐の前兆	40
第6話	Substitution	47
第7話	友の心が青臭い	56

第1話 赤い狼煙を上げろ

「よっこい・・・しょっと。」

その日、旅をしている俺、アカはとある小島に上陸していた。以前からその島には、とある海賊が船と宝を残したという噂を聞いていた。

旅の途中で通る道だったのもあって、その場所に来てみたのだ。

ちなみに俺はいわゆる転生者というやつらしい。小さい頃ぼんやりと前世の記憶というやつが蘇ってきて、ここが自分がいた世界とは違うことに気づいた。

なんとびつくり、あのONE PIECEの世界！

生まれた島では時々海軍が来て物資調達に來たり、温厚な海賊が停泊に來たりしてたから

ほぼ間違いない。

ただできればきちんと最終回まで見てからこっちにきたかったなあ・・・。

せめてFILM REDだけでも見れてよかったけどさ。

「ホントにここにあるのか？ただのウワサだろ？」

「まあダメ元だよ。文句があるなら着いてこなかったらよかつたろ。」

「うるセエ！おめえおれがないとすぐむちやすんだろ！」

「はは・・・。」

口が悪いのはオウムのパロ。長い付き合いになる。頭が良くて鳥であることを忘れるくらいベラベラ喋るんだが、色々誤解されるからその言葉使いやめなさい。

情報通で、海賊や海兵にも詳しいし、何なら毎日ニュース・クーから新聞買い付けて読んでいる。

鳥が鳥から新聞買うってなんだよ。

しばらく探していると、ついに洞窟の中にその噂の船を見つけた。見つけたんだが・・・

「いや、世界観が違うだろおおお!!」

そこにあつたのは、あの海賊戦隊ゴーカイジャーのゴーカイガレオン。

なんてこつたい。俺をここに転生させた神様は俺を一体どうしたいのよ。

確かに同じ海賊かも知んないけどね。

どっちも男の子は好きかもしれんけどね。

少なくとも俺はどっちも大好き。

何？子供っぽいって？

ウルセエ、好きなものに嘘はつけないんじや俺は！

「すげえきちんと整理されてら……。最近まで使われていたみたいだ。」

「あのシユミわりいふねのなかみとはおもえねえナ！」

「やめなさい、いいじゃない真っ赤な船体。」

そう言い合いながら船内を見回っていると、大きな部屋の真ん中の柱の前に宝箱が

置いてあつた。開けてみると、その中には歴代戦隊たちのレンジャーキーがぎっしり詰まっていた。

モバイレーツとゴーカイセルラーも入ってるよ。しかも人数分！

うおお、男のロマンだ！昔友達に興味で揃えてたから、みんなでトレンジャーボックスに詰め込んで遊んだっけなあ。

すげえ、ドンブラやキングオージャーのまで入ってるよ。

あ、でも流石にオーズとかメタルヒーローはないなあ…。

あとはなにが…あれ、パロのやつ、どこいった？

「おいアカー！外に海賊たちが来てるゾー！」

「なに?!」

「いやあやりましたね頭！今回はかなり稼げましたよ！」

「ああ、おまけにいい女どもも手に入った、ありや良い値で売れるぞ！」

「「ギャハハハハ!!」」

マジか、ほんとに海賊だよ。しかも割とワルの方。
どうしよ、これ下手したら戦うことになるぞ。

将来の為に海軍のおっさんにある程度の戦闘は習っておいたけど、
いくらなんでも数に差がありすぎる。

幸い船はあいつらに見つかっていない。バレずにずらかれば…。

「お願いです…娘だけでも、助けていただけませんか？」

「ああ!?なに言ってるやがる！子供の方が高く付くんだよ！無理に決まってるんだろ！」

「いたっ…！」

「ああっ、町長婦人！」

「おかあさん！」

「私は大丈夫よ。気にしないで…。」

「ですが…。」

「そこ、静かにしろ！」

あいつら…っ！

…くそっ、あんなの見ちゃったら、見逃せる訳ないだろ！

どうにかバレずに助けにいけるか…?…ん？

「かしらあ！面白いもんみつけやしたぜ！」

「はなセコラア！テメエら6000万のツノトカゲ一味ダナ!?」

「ほお、よく喋るオウムだ。オマケに俺たちを知ってるとは、こいつも売れるかもな。」

あのバカやろおおお!!!

いつの間に捕まってんだよ!?…さっきまで隣にいたのに!?

しかもあの船長6000万もするの!?!?
ああもうどうすれば…。

カツン…。

「あっ…。。。」

「」「」「」「」

………

しまったあ!!!
なあんでよりによってこんなところに瓶があ
!!!???

「おい、そこに誰かいるのか!出てこい!さも無くばぶつ殺すぞ!」

あやつべ、どうしよ…。

ええいもう知らん!

「おらあ!!」

「ひげぶつ!?!?」

「んなつ、あいつ瓶を船長に!!」

「な、なんてこった!せんちよおおお!!」

よし船長にクリーンヒットお!このまま一気に助け出す!

「ちよつとこれ貸して!」

「何っ、テメエ俺の剣をぐはっ!」

「このつやりやがったなゲフツ!」

「くそっ!こいつなんてすばしっこさだ!全然追いつけねえ!」

よし、結構なんかなってる、あとはあのバカオウムと女の人たち
を…。

ドウン!

「ぐあっ!」

「へへへ・・・調子に乗りやがって・・・。ようやく仕留めたぜ・・・。
くそっ・・・あの船長もう復活したのか・・・弾が当たったのが
肩だっただけまだマシか・・・。」

「アカ！テメエこのやろウ！なにつかまってんだヨ！」

「おめえにいわれたくねえよ！」

「うるせえぞ小僧！」

「がっ・・・！」

「テメエみたいなガキがっ、俺たちに楯突くんじゃ、ねえよっ！

ヒーローごっこはっ、家でやんなっ！」

やばい・・・意識が、遠のいて・・・このままじゃ・・・。

「テメエも後であの女たちと一緒に売っぱらってやるよ！なかなか腕
が立つみてだからな！」

今日は大豊作だよ！だっはっは！」

・・・くそっ。こんなところで負けてたまるか。

こんな時、前世で見た戦隊のヒーローなら・・・どうする・・・。

キャプテン・マーベラス・・・アンタなら、きつと・・・。

「ふざっ・・・けんな・・・。」

「ああ？」

もうこうなったらヤケクソだ。このまま死ぬんだったら、せめ
て・・・。

「テメエらみたいなのを野放しにしたら、また絶対同じようなことを
するだろ・・・。」

「だったらなんだよ、正義の味方気取りか？ああ!？」

「そんなんじゃないやねえよ・・・、ただ・・・気に入らねえだけだ。」

「はあ!？」

「テメエらみたいなクズ海賊どもがな・・・。お前らみたいな烏合の衆
が群れただけで強くなったつもりのおカスどもがいるおかげで
こっちは傍迷惑してんだ・・・。」

「こいつ・・・さつきから聞いてりゃクズだのおカスだの・・・。
「だからあ！」

一気に胸ぐらを掴まれて凄まれるが、ここまできて引き下がるわけにはいかない。

思いつきり頭突きをかまして高らかに叫んでやる。

「っはっ！」

「テメエら全員、ここで俺がぶつ潰す！」

その瞬間、ポケットが急に光り出し、辺りが眩しく照らされ始めた。

「な、なんだ？」

「ま、眩しい！」

「一体何が・・・!？」

気がついて目を開けると、ポケットに入れていたゴーカイレッドのレンジャーキーとモバイレーツが真っ赤に光り輝いて、俺の目の前に現れた。

まさか、使えつていうのか？

俺なんかに使えるのか？数多の伝説を受け継いだこの力に、俺が選ばれたのか？

「な、なんだそれは!？」

「さあね・・・ただ、使い方はわかるよ。」

あとのことはもう知らん。

こうなったら行くところまで行ってやる。使い方はわかる。よっしゃあ、

「さあ、行くぜ!!」

レンジャーキーを展開し、モバイレーツに差し込む。昔何度も見てワクワクしたあのヒーローに、俺が変身する！

「ゴーカイチェンジ！」

「ゴオーカイジャー!!!」

「な、なんだお前は!?なんだその姿は!？」

「俺か・・・俺の名はゴークイレッド・・・。」

さあ、派手に行くぜ!!!」

「姿が変わったからなんだ！ 野郎ども、やってしまえー！」

あ、やベキタキタ。どうしよ、ええと、武器武器……ふんぬううううう……。

あ、出た！ ゴークアイスベルとゴークイガン！ よっしやあ！

「ぐあっ！」

「このっ、どっから武器を！」

「くそっ、こいつやるぞ！」

よし、これなら行けるかもしれない！

「何を、おい！ バズーカ用意！」

「アイアイサー！ バズーカ砲、ファイア！」

どかーんと言う音と共に、こっちに砲弾が飛んできた。

ウソーン、いきなりあんなの卑怯よ！ あ、海賊だから良いのかな

？

言ってる場合か！

「だったら、ゴークイチェンジ！」

「キーングオージャー!!」

「おっしやあ！ 命中し……?？」

「効かんわあ！」

「どべら!？」

キングズウエポン盾モードで砲弾を防ぎ、そのまま相手をぶん殴る。

盾は鈍器、はつきり分かんだね！ ドヤア

「次はこれだ！ゴーカイチェンジ！」

「ドォーンブラザーズ!!」

「こいつ、ドンだけ変身するんだ！」

「ドンなに変わろうが所詮一人だ！やってしまえ！」

「さあさあ、ドンドン行くぜ！」

「よし、船長！あとはお前だけだ！」

ゴーカイチェンジを駆使しつつ戦っていたら、いつのまにか残り6000万ベリーの船長のみだった。人質もなんとか全員解放して、五月蠅いオウムも助け出した。やったね！

「コノヤロウ！助けるのがおせえんだヨ！カツコつけてないでもっと早くしやがれ！」

「お前助けてもらっという何つう言い草だよ！いつのまにか捕まってたくせに！」

「というか本当にいつ捕まったのこいつ!?!目え離れたの一瞬だぞ!?!」

「くっ・・・舐めるなよ、伊達に一海賊団の船長やってねえんだよ！オラァ！」

「うおっ、あつぶねえ！」

「うわ、なにあの刀、なっが！あの船長、あんな武器持ってたの!?!」

「よくもコケにしてくれたな・・・。テメエだけはぶっ殺す！」

「くそっ、こんな時は・・・ゴーカイチェンジ！」「シーンケンジャー!!」

「んな!?!」

「そっちが長い刀なら、こっちはでかい刀だ！」

「うおい、それ絶対刀じゃねえだろ!？」

ウルセエ、烈火大斬刀はれっきとした刀だよ!うらあ!

バキイン!

「あ……。」

「チエストおおおお!!!」

ふっ……あんな細い刀で烈火大斬刀に勝とうなんざ甘かったんだよ。

よし、これで全員縛れたな。

「あ、あの……本当にありがとうございました……。なんとお礼を言ったらいいか……。」

「いや、もうお気になさらず……。」

「おにいちゃん、ありがとー!」

うっ……!その笑顔はやめてくれ!ロリコンじゃないはずなのに……

胸が苦しくなっちゃう!

「オイ、何きもい顔してんだヨ。オマエマサカ……。」

「だまらっしやいこのクソドリ!唐揚げにしてやる!」

「うわヤメロ!オレはウマくないゾ!」

「あはは、とりさん面白おい!」

こんのオウムめ、いつか美味しくお料理してやる。

って、こんなこと言ってる場合じゃねえ。

「助かったのはいいけど……どうやって島まで戻ればいいのかしら……。」

「船はあるけど、この辺は今の時間帯、風が少ないから……。」

あいつらの海賊船なら、全員乗ることはできる。だけど風がなければ、帆船は

進むことができない。そもそも風があっても、行きたい方向に吹いていなければ

あらぬ方向へ進んでしまうかもしれない。

さてどうしたもんかと頭を悩ませていると、ポケットのレンジャーキーに手が触れた。

あ！

「オイ、この船をどうするつもりダ？いくらなんでも動かねえだロ？」
「まあ見てなさいって、オレの考えが正しければ・・・。」

今俺たちはゴーカイガレオンの操舵室にいる。もし、このレンジャーキーが俺を

選んでくれたなら、こいつでガレオンを動かせるかもしれない。

よし、レンジャーキー、セット！上手く行ってくれよ！

「な、なに!?地震」

「おかあさん、あれ見てー!」

少女が指差した方向をみんなが向くと、そこには信じられない光景が広がっていた。

なんと、真っ赤な船が洞窟から一人でに動いて出てきていたのだ。

「おーいみなさん！海賊船に乗って！この船で引っ張っていきますー!」

「よかったあ、みんな無事で！」

「あなた！」

「おとおさあん！」

いやあ、さすがは宇宙を旅した船。風なんかなくてもあつという間に着いちやったよ。

まあ、さすがに空飛んで行くわけにはいかなかったけどね……。

「いやあ、本当にありがとうございます！まさか生きてもう一度会えるとは思いませんでした！さあ今夜は宴です！是非楽しんでいってください！」

「あ、はい、そりやどうも。」

「ヨツシヤア！食いまくってやるぜ！」

お前は少しは自重しなさいバカドリ。

「おにいちゃん、もういつちやうの？」

「いやあ、さすがにこれ以上お世話になるわけにはいかないからね。」

「なあに、そのうちまた来てやるヨ！」

まさか1週間もいることになるとは思わなかった。すっかり町長さんの子供とも仲良くなったが、あんまり長いこといると申し訳ない。

「しかし……町長さん。海賊たちの宝、こんなにもらつてよかつたんですか？まだ街の復刻には何かと金がいるんじゃない？」

「いえいえ、あの海賊たちを海軍に引き渡したら、あの宝の何倍ものお金が手に入ったんです。むしろこの島の英雄にもつと持っていて欲しいぐらいですよ。」

英雄つて……そんなつもりで戦ったわけじゃないんだがな……。

「それで、これからどちらに？」

「そうですね……。」

正直、まだ全然決めていない。

とりあえず、残りのゴーカイジャーのメンバーを探してみるのかもしれない。

あるいはこの世界のいちばんのお宝を探しに行くのも面白そうだけどもとりあえずは……

「旅をしながら考えます！お世話になりました！」

「あばヨ！また会おうぜ！」

この先どうなるかは、俺にもわからない。

でもこのガレオンに乗っていれば、きっと大丈夫。

俺の旅は、ここから始まるんだ！

……多分。

第2話 海賊達のデスレース

「いい酒ですね」

「……どうも」

どうも、アカです。今俺とパロはハンニバルという島にいます。

うちのあほ鳥がよく食うので、とりあえず物資補給のために寄ってみただ、なんかものつそい人で賑わってます。なんかイベントでもあるのかな？

しかし……ハンニバルってどっかで聞いた気がするんだよな……。

原作で出てきてたっけ？

どうしよ、アニオリとかだったらすすがに記憶にないかもしれないぞ……。

俺基本的に漫画中心だったし、映画はFILMシリーズぐらいからしか見てないから、

抜けてる部分も多いんだよな……ん？

「じゃ頼むぜ……」

「ああ……」

なんか店主がカウンターの端っこの方でお兄さんとコソコソやっている。よくみると、あの人店主に200ベリー渡してどっかいっちゃった。

なんだあれ？

「なあパロ、あれ何してんだ？」

「ア？ ああ あれは多分、レースに出るんだナ」

「レース？」

その「レース」と言う言葉に、酒場の何人かが反応した。

「ああ、この島で聞いたんだけど、ここでは数年に一度、海賊たちのレースがあるみたいだ。」

ゴールへのエターナルポーズをもらって、一番についたヤツが賞金をもらえる分かりやすいレースだよ。

なんでも入り口はどつかの酒場らしいから、それがここなんだロ」「へー、そんなんがあんのね」

しっかしこいつはいつもどこでこんな情報仕入れてくるんだろうな。本当に鳥？

「ナニ、もしかして出るつもりカ？」

「んー、でも別に金には困ってないんだよな……」

「マアあの宝まだ残ってるもんナ、

でもおまえ、ちよつとソワソワしてるだロ？」

「え、なんでわかった!？」

「顔ずつとニヤニヤしてたゾ」

え、まじで!？」

まあ、正直面白そうではある。だって海賊のレースって、なんか字面だけでワクワクしてくるじゃん！せつかくならちよつと出てみたいけど、流石に一人じゃなあ……。

「なんだい、お前さん、アレに興味あんのかい？」

「え、ああ、まあ……」

「見たところ1人と1匹かい。やめときな、命が幾つあっても足りねえぞ」

まあそうだろうな……。それが普通の考え方だよ。

こんなヒョロイの1人とオウム1匹じゃそうも見えらあよ。

「でもさ、男ってやっぱそう言われるほど気になっちゃうのよね」

「ソーソー。ソユコトソユコト」

「……ハッ、そうかい」

あつ、今鼻で笑ったなこのヤロー。

「……着いてきな」

店主に案内されて着いたのは、薄暗い洞窟だった。

「ここを真つ直ぐ進めば、お望みの場所だ。100ベリー2枚が合図になってる。覚えときな」

「ありがとマスター。じゃ、行ってくるよ」

「言つとくが俺は止めたぞ。死んで後悔するなよ」

あらやだこの人意外と良い人だよ、結構心配してくれてるよ。

「忠告どうも、でもそんなのが怖かったら、ハナから海賊やってないよ」

「……そうだな、まあせいぜい頑張んな。無事い祈るぜ」

「言われんでもガンバルぜ！」

その後、しばらく進むと、なんか気味の悪いデブがいた。

とりあえず言われた通り硬貨2枚を見せると、ドアを開けてくれる。

その先はなんとも煌びやかだった。

何人もの海賊がわいわい騒ぎ、飲み食いしたり、賭けをしたり、とにかく

「海賊」って感じの場所だ。

しかし広いな……。どういう作りなんだ？

ま、いいや。

「よう坊主、賭けに来たんか？ 誰に載せる？」

「賭け？ ああ、レースのダービーか」

「ん？ お前まさかレースの方に出るんじゃないやねえよな？ やめとけやめとけ。」

あんなん命を捨てに行くようなもんだぞ」

あつそ、まあここまで来ちゃったらそんなの知ったこっちゃない。

あんなオツサンほつといてとりあえず受付行ってこよ。

「はいサイン……と、参加料」

「はいよ、ほれ」

イカすモヒカンの胴元からエターナルポーズを受け取り、朝まで暇になった俺たちは食事を取ることにした。なんでもここの飯は全部タダらしい。やったね食費が浮くぜ。

とりあえず席確保だ。

「ええと……席席……あ、相席いいですか？」

「ガツバクハグハグ好きにしろゴツクンモグモグ」

「スゲエな、食いながら答えたゾ。器用なヤツだな」

ほんとすつごい食いつぶり。そんなふうまいのかね。

さて、俺らも注文しますか。

「うめえ、マジでうまいなここの飯！」

「アア、とまんねえナ、イクラでも入るゾ！」

いやあ、正直舐めてた。俺もそれなりに料理は出来るが、まさかここまでうまい飯にありつけるとは思わなかった。今のうちに食い溜めときたいわ。

「おい、追加まだか！」

「は、はい！ すぐに……へ？ 皿が消えた!？」

「おいドンドン食おうぜ！ ソラソラ！」

「おお！ 気が利くなこのオウム！」

「おいパロ、その他のテーブルのじゃ……」

「いいじゃねえカ、ここにいるの海賊ばつかだ口!？ 海賊のルールで食えばいいんだヨ！」

「いいこと言うなあお前！ お前も食べ食べ、いらねえんなら俺が貰うぞー！」

「なんでお前らは意気投合してんだよ」

スゲエ、パロもそうだがこの赤髪のにいちゃんもよく食うな。その細い身体のどこに入ってるんだよ。

イリユージョンだねイリユージョン。

「おい！ さつきから食いもんが無くなっていくかと思えば、お前らの仕業か！」

「何舐めたことしてくれてんだゴラア！ 俺らが誰だかわかってんのか！」

ほら見ろ、怖い人たちが怒っちゃった。みんな揃ってご立腹だよおい。

「さあ、知らねえな。一体どちらさんだ？」

「聞いて驚くな……俺たちはガスパーデ海賊団のクルーだ！ 懸賞金9500万の超大物だぞ！」

9500万か。確かにそりやすげえ。超大物で間違いないな。

「だからなんだヨ、船長が凄くても、お前らは引つくるめて〇ベリー
「じゃねえカ」

……。

……。

……。

「なんだとこのクソ鳥!!」「いい度胸じゃねえか!!」「搔っ捌いて焼き鳥にしてやる!!」「テメエら皆殺しだ!!」

おいこらああああ!!!

「何してくれてんだこのアホオウム！ 火に油撒き散らしやがった！

後処理すんのこっちなんだぞ！ わかってんのか！」

「だっはっはっは！ いいねえお前ら！ 最高だよ！」

「んでなんでお前は笑ってんの！」

「テメエら……おちよくってんのか!!」ドン！

「うわっ銃撃って来やがった！」

「こっちだ、隠れる！」

いつの間にかお兄さんがテーブルを2つ横にして盾にしている。

うおお、お邪魔しまあす！

「さて、どうするよ。あいつらみーんな怒っちゃまった。このままいけば3人とも殺されちゃうぞ」

「このブタドリが煽ってお前が笑ったなお陰でな！」

「ピギヤー！ オイ、ハネを掴むんじゃネエ！」

「まあ……ここまで来たら向こうもそう簡単には収まってくれなさそうだな。

こういう時は……」

懐からゴーカイサーベルとゴーカイガンを取り出す。どっから取り出したかって？

んなもん気にしちやおしまいだ！

「向こうのルール海賊の流儀で戦ってやるしかないだろ！」

「ハハっ、そう来なくっちゃな！」

「どっちか貸してやるよ、銃と剣どっち派？」

「じゃあ剣で」

「ほらよ、よしいくぞー！」

「おっ、出てきたぞ！ やっちまえ！」

「やられてたまるかよ、そら！」

「ぐあ、あいつ撃つてきやがった！」

「ふっ……撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけ、だぜ……」

「うおおなんかカツケエこと言ってるぞ！」

あれ、意外とウケちゃったわ。ってやってる場合か！

あつちはどうなってるんだ？

「くそっ、こいつなんて身の軽さだ！」

「よつと！」

「全然つかまらねえ、ぐああ！」

「ほらほらこつちだ！」

「待てゴラァ！」

スツゲエ、なんて身のこなしだ！ あの数をすり抜けながら確実に倒してやがる。ただの大食い系にいちやんじやなかつたんだ！

スルスルと海賊の群れの中に飛び込み、相手に蹴りを喰らわせていく。
曲芸のように身軽で、闘士のように強い攻撃で次々とていを倒していく。

その動きに、周りの人間たちは目が離せない。

「アッ、ア！ 思い出しタ！ アイツ海賊処刑人のシユライヤ・バス
クードじゃねえカ！」

「何!? あのシユライヤだとお！」

「おい本物かよ！」

「1人で5000万の賞金首を仕留めたって言うあの!？」

パロの一言で、なんかみんなが騒ぎ始めた。え、何？ すごい人なのあの？

「よそ見してる場合か！」

「どわっ、クソ、数が多い!!」

もうこうなったらやってやる! さあ、派手に行くぜ!!

「ゴーカイチェンジ!!」

「ゴオーカイジャー!!」

「うわっ、姿が変わった!」

「なんだあの赤いのは!」

「な……お前、なんだその姿、能力者か!?!」

あら、シュライヤさんまでビックリしてら。残念、これ悪魔の実関係ないのよ。

「そら!」

「こいつ、さつきより動きが良くなって……、グオツ!」

「まだまだ! 数でおせえ!」

くそっ、拉致があかねえ! だったら俺もシュライヤのスタイルを見習ってみるとするか!

「ゴーカイチェンジ!!」

「ルパーンレンジャー!!」

「うおっ、また変わった!」

「今度はなんだ!?! 怪盗!?!」

「予告する! お前ら全員ぶっ倒してやる!」

「んだとコラア! やってみやがれ!」

「うおらあああ!!」

ルパンレンジャーは戦隊の中でも機動力に長けている。この人数を相手するなら丁度いい!

いくぜ! ショータイムだ!

「ごんの、シュライヤのやつよりいい動きしやがって!」

「くそつ、なんてすばしっこさだ！」

いくら数が多くても、今の機動力はそう簡単に追いつけるものではない。

一味がいくら束になっても、常に動き回り飛び回り、

空中からVSチェンジャーで討ち取られる。

まるで雲をとらえようとするように、手が届かないのである。

「スツゲエ……。なんて動きだ……」

「オイ、余所見してる場合かシユライヤさんよお！ もうあとがねえぞー！」

「やっべ……」

いつのまにかシユライヤは端まで追い来れてしまった。このままでは吹き抜けから下の海へ落ちてしまう。何か捕まるものがないかと探すが、あいにく近くには何も無い。

「野郎ども！ 纏めてかかれえ！」

「！！！！うおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「くそつ、万事休すか……」

なんとか抜け出す隙間を探していると、なんと天井に張ったバツクルのワイヤーに捕まったルパンレット、もといアカが飛んできた。

「捕まれ、シユライヤ！」

「はあ？！」

「ボーツとしてないで早くしろ！」

意味がわからなかったが、今は文字通りこの手を掴む以外他に手が無い。こうなったら

もうヤケクソだ。この手に縋るしかない。

「よし、掴んだ！」

「離すなよ！」

「！！！！うおお……え！！！！！！」

そのまま一気にワイヤーの勢いのまま柵の外に出ると、飛びかかってきた海賊たちはそのまま柵を飛び越えて下の海にどさどさと落ちていく。

後のことを考えず飛んだ結果がこれである。

「「「「うおおあああああああ!!」「」「」」」」

「いよつとおー!」

情けない声を上げながら落ちていくアホ海賊を尻目に、アカはワイヤーを一回外し、下の階の天井に貼り付けることでなんとか下の階に転がり込んだ。

「ああぶなかつたあ!! タイミングミスってたら俺らも落ちてたな!」

「ははははは! お前最高だぜ! まじでありがとよ!」

「いやあお前もすごかったよ! はははは!」

「おいテメエら! 何終わった気でいんだ!」

「ん?」

二人で肩を叩き合って喜んでいると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

上の階で一番最初に啖呵切ってきたチンピラ海賊である。

どうやら偶然落ちる時に下の階に入れたらしい。悪運強いことだ。

「まだやんのか、お前も懲りねえな」

「ほつとけ! こんなところで終われるかってんだ!」

「うるせえなあ……」

血の底から聞こえてきたような低い声。3人でその声の方を向くと、そこには屈強な大男が一人薄暗く廃れた酒場にどっかりと座っていた。

それを見た瞬間、チンピラ海賊が全身を震え上がらせる。

「……………っつガスパーデ將軍!?!?」

「ガスパーデエ!」

「ガスパーデ…………ツ!」

三者三様、各々が彼に視線を向ける。

そしてこの出会いが、このレースを、そしてこの海を引っ掻きまわす大騒動に繋がるのは、今はまだ誰も知らない……。

第3話 夜明け、そしてスタート

「じつちゃん、じつちゃん！しっかりしろよ！」

「ああ・・・アナグマか、心配すんな。すぐに治るさ。」

「何言ってるんだよ、もう1週間も熱が下がってないじゃんか！」

「なあに、まだくたばるには早いわい・・・。さて、ボイラーの点検を・・・。」

「ダメだよ、寝てろよお！」

「ガスパーデ將軍：な、なななんでここに・・・？」

「俺様が此処にいちやあ駄目なのか？」

「い、いえとんでもございません！ただ、今日は船の方で飲んでると聞
いていたもので・・・。」

「いちいちおめえの許可がいるのか？」

「いいいいえすみませんすみませんどうぞごゆつくり！」

こいつがガスパーデ・・・。なんて覇気だ。こないだ戦った600
0万とは格が違う。

威圧感が尋常じゃない。

隣に立っている刺青の男もやばい。物静かだけど、身体中から殺気
が溢れている。

「気をつけ口、アイツは元海兵のクセに、自分の乗っていた海軍の軍艦
を奪って海賊になった

イカれたやつだ。なにしてくるかわからねえぞ。」

「まじでか、それ本人の前で行っちゃうのか。聞こえないのがせめて
もの幸いだよ。」

本当にこの鳥は空気を読まない…。聞かれてたらコイツチキン南
蛮にでもして差し出すかな。

「おい、一つ聞いていいか？」

「はい？」

「テメエは誰だ？」

「へ？い、イヤだなあ。いや、オレはホラ・・・。」

「しらねえな、どこの馬の骨ともわからねえやつに軽くやられるようなやつは、

俺の部下にやいねえんだよ。」

「あ、いやこれはその実は・・・。」

下つ端が言い終わらないうちに、刺青の男は言い訳をしようとする男の方を掴んで、下に放り投げた。なんちゅう腕力だよおい・・・。

「おい、随分好き勝手やってくれたみたいじゃねえかテメエら。なかなか腕がたつみてえだな。」

「そいつあどうも。」

「どうだ、2人とも俺の元で働いてみねえか？悪い話じゃねえぞ？」

おおう、いきなり勧誘かよ。普通もうちよい段階踏むもんでしようよ。

というか、なんで自分が上に立つこと前提なのよ。腹立つわあ。

「おいおい、俺は賞金稼ぎだぜ？あんた達を狩る側、いわば敵だぞ？」

「こちとら元海兵だ。腕と度胸があればいい。つええやつは好きなのさ。」

「そりやまた豪胆なことだ。だとよ、どうする？」

「あ、すみません、自分もうレースに参加することに

なつちやつてて、だからそれは無理です。」

こういう時は、きちんと変身を解いて相手にきちんと

自分の意見を伝えるのが大切なのである。ここ、テストに出るわよ！

「・・・そうか。」

「ええ、それに・・・」

テメエみたいなのやつの下につくなんぞ、まっぴらごめんじゃバーカ!!!」

「ああ?」ピキッ

あれ、聞こえなかったかな?もう一回言った方がいいかな?

「おい、ニードルス、少し遊んでやれ。」

あ、やべ、刺青の男が来た!ちよつと煽りがすぎたかしら!?

「ごめんそれ返して!」

「あつ、おい!」

「ゴーカイチェンジ!」

「ゴオーカイジャー!!」

キイン!!

「.....!!!」

「あつぶねえ、後一步でやられるとこだったぜ。」

「ほお...やるじゃねえか。賞金額5700万ベリーのそいつの攻撃を受け切れるやつはそういねえ。誇っていいぜ。」

マジでか、コイツも賞金首なのね。道理で強そうなわけだよ。

て言うか力強いな...ぐぬぬ...

「まあいい、威勢のいい奴は嫌いじゃない。気が変わったら、いつでも俺の船に来るといい。」

帰るぞ、ニードルス。」

そう言うとガスパーデは奥の方に消えていった。結局騒ぐだけ騒いだら、さつき食った飯が

全部消えちやったよ。あー腹減った。また食い直したいけど、あそこ今めちやくちやだろうからなー。どうしたもんかなマジで。

「まあ、明日の朝がスタートなんだから、まだ時間あるだろ。とりあえず船に戻ろうぜ。」

「だナー！」

「おい、ちよつと待ってくれ。」

振り向くとシユライヤが神妙な顔でこつちを見てきた。なんだろうか？

「少し…話したいことがある。俺もお前の船に連れて行ってくれ。」

「へ？」

「ピャ？」

「お願いします、ガスパーデさん！じつちやんを助けて下さい！」

「そいつは？」

「釜炊きのビエラの助手ですよ、ジジイが病気だつてうるさくて…。」

「お願いします！おれ、なんだつてするよ！約束する！だから…。」

「ガキが喚くんじゃ…」

「ほお…なんでもか？おい、そいつにお前の銃をやれ。」

「ガ、ガスパーデさん!?何言ってるんですか!？」

「今この島はレースのために集まった海賊がウジャウジャいるんだ。

減らず口のルーキーやら腕力だけの能無しやらがいくらでもな。

そいつらの首を持って帰って来たら考えてやる。」

「ほんとか！」

「間抜けのクビでも酒の肴にはなるだろう…。」

「…よし！」

「すげえ船だな…中はこんなに広いのか。」

「まあね、とりあえず座りな。」

とりあえずシユライヤをテーブルに座らせ、お茶を用意する。

ちなみにガレオンの内装はだいたいテレビで見てたあの感じそのままなので結構広く、一人と一匹には結構広い。他の人がいるのはちよつと新鮮だ。

「で、話って何よ?」

「ああ…お前、レースに出るんだよな?」

「ああ、出るよ。」

「なら頼みがある。その間だけでいい。俺をこの船に乗せてくれ。」
「ええ？」

「どういうことだ？賞金稼ぎがなんで海賊のレースに？」

「というかそんなこと言ったら、そもそもあんな場所に賞金稼ぎがいること自体よくわからない話ではある。」

「最初は目押ししい賞金首でも探しに来たのかと思ったけど、違うんかな？」

「ガスパーデ・・・あいつは元々俺が次に狙ってた賞金首だ。アイツを獲得すれば、俺の賞金稼ぎとしての名前が上がる。あそこにいたのは、ガスパーデと戦えそうなやつを探してたんだ。」

「それで、俺？」

「ああ、一番可能性がありそうだったからな。実際、あのニードルスとも五角以上だったし。」

「だってヨ、どうすル？」

「・・・。」

正直悪い話ではない。さすがにひとりでは厳しいと思っていたし、シユライヤ自身かなり強い。互いに利がある話ではある。向こうが裏切るかもしれないが、まだ懸賞金もついていない自分をこいつが海軍に突き出すとはあまり思えない。

「だけど、一つ気になっていることがある。話によれば、ガスパーデの懸賞金が目当てみたいに関こえるけど、さつきガスパーデと面と向かってあった時、」

『ガスパーデ・・・ッ！』

あの顔と目は、ただ獲物を見つめる賞金稼ぎというよりも、どちらかと言えばまるで、復讐に燃える目だった。おそらくこいつの狙いは賞金とか、名をあげるとか、そういうところじゃない。きっと、ガスパーデそのものにある。

だけど、きつと言いたくないんだろう。流石に触れないほうがいいかな。

「どうだ？悪い話じゃないはずだ。」

「・・・分かった、よろしく頼むよ。」

「よし、取引成立だな。」

そのまま互いに固く握手をする。なんかこそばゆいけど、しばらく一緒に後悔するってことだしね。

「とりあえず、明日の朝に向けて今は寝よう。部屋は結構空いてるから、好きに使ってくれ。」

「ああ、ありがとよ。」

「寝坊すんなヨ！」

またこの鳥はいらんことを言う・・・。

『おにいちゃああああん!!』

「はっ！・・・くそ・・・。」

眠りにつくと、ことあるごとにあの日の夢を見てしまう。

船大工だった親の元に修理に来た船を妹と見に行ったあの日、ガスパーデが珍しい蒸気船に目をつけて、それを盗みに来た。

そしてついでに如く街を襲い、3歳だった妹は川に流されて死んだ。

あの日以来、やつの顔を忘れたことはない。

血を浴び、人を騙し、できることは全てやった。

そして、ついにここまで来た。

この手で、やつを、討つ。

次の日の朝、とりあえずガレオンの甲板にてスタートを待つが、周

りには船が全然見当たらない。

「もうすぐスタートだけど・・・本当にここにいればいいのか?」

「ああ、ここで大丈夫だ。」

「でもこの指針はあの向こうの山を指してるぞ。」

「ソレで良いんだヨ。」

パロ曰く、数年に一度、大きな潮の逆流と強い風が来るタイミングを見計らって、各々支流から山を登り、そのまま山の頂上から一気にスタートするらしい。

それをレースに使うって発想がもうすげえよ。先人は偉大ですな。

「で、そのままこのパルティアってところに行けばゴールか。」

「おい、忘れんなよ。おれの目的はあくまでガスパーだ。」

「わーってるよ。」

お、風が吹いて来た。そろそろ始まるな。　　つてうおおお!!?!?

「な、なんじゃこの風はああ!!」

「捕まっとけ、一気に駆け抜けるぞ!」

「ぴゃああああああ!!!」

一気に風が吹き抜け、そのまま船を加速させる。

下手をすれば船が転覆仕掛ける風が走り、そしてそれに合わせるように潮が動く。

そのまま山を登る川へと入り、そのままトンネルを通過する。

そして、そのまま一気に街へと出る。

何人もの人が海賊達を応援するため、川の近くで大声を出している。

まるでパレードのように、怒号、悲鳴、歓声、あらゆる声と感情がその場を支配している。

思わず震えが止まらない。迫力に押しつぶされそうだ。

だが、負けてなるものか。

「よし行くぞー！目指すは優勝だあ！！」

まだレースは始まったばかり。この先どうなるかは、神の味噌汁……いや、みぞ知る。

第4話 小さな密航者

海賊たちが各々の支流から山の頂上を目指し、一気に駆け上る。海流と風が船を押し上げて、後ろも振り返らせずまっすぐに突き進んでいく。

どうもアカです。たった今レースがスタートして、船が一気に山に登っています。いやあ風が気持ちいいね。このまま一気に頂上まで一直線だぜ!

と、言いたいところだけど……

「オラア! その小さい船! ジャマだ! どきやがれ!」

「優勝すんのは俺たちなんだよ! 前を行くんじゃねえ!」

「その真っ赤な船、血でもっと赤くされてエのか!」

なんか、支流の中でもライバルがかなり多いところを選んじやつてみたいで、ものすごい喧嘩売られてます……。

てかやっぱこの船目立つから、目えつけられまくってんな……。正直そのうち色変えようか迷い始めてるけど、流石にこの伝説の船の色を変えるのは気が引けるんだよね……。

もう左右と前に合計3隻、すっかり囲まれちゃったよ。四面楚歌一歩寸前。どうしましょ。

「おい、どうすんだよ!? このままじゃガスパード云々以前にお陀仏になっちまうぞ!」

「ピャアアアア!!」

「こうなったら迎え撃つしかないね。とりあえず、優勝有力候補はこの支流にはいないみたいだから、なんとか突破するよ!」

「言ってくれるじゃねえか! だったら遠慮しねえぞ! 撃てえ!」

げげっ、左の船、いきなり大砲打ってきやがった! 船体の横に食らったらひとたまりもないぞ!

そっちがその気なら、こっちも容赦しねえぞこのやろう!

「ゴーカイチェンジ！」

「ゴオーセイジャー!!」

「ウインドライブカード、天装！」

『スプラッシュ、スカイック パワー』

ウインドライブは風に乗せて物を運ぶゴセイレッドの天装術。大砲を打ち返すことぐらいならわけではない。店員さーん、クーリングオフじゃコラア！

「うわっ、弾が返ってきたぞ！」

「な、なんだ、風!？」

「うわあああ!!」

よっしやあ、まず1隻！ どうだ、こんにやろめ！

「なっ……なんてやつだ」

「ヨッシャア！ よくやつタアカ！」

「だったら海戦じゃあ！ 野郎ども、相手は2人と1匹だ！ 乗り込んで捻り潰せ！」

「」「」「おおおおおお!!」「」「」「」

うわっ、なんてヤケクソな作戦。こんな奴らに俺の船を踏ませてたまるかこのやろう！ こんな時は乗せる前に海に沈めてやる！

「ゴーカイチェンジ！」

「マージレンジャー!!」

「マジ・マジカ!!」

飛んで火に入る夏の虫ってね、汚物は魔法で消毒じゃあ!!
うははは、燃える燃えるお！

「ぎゃああ、アチいいいい!!!」

「海に飛び込め！ 燃えちまう！」

「うわっ、船にまで燃え移ったぞ！」

よし、右も撃破、残るは前の1隻のみ。さあどうお料理してくれようかしら。

って、もう向こうの船長目に見えてアタフタしてるよ。

あんなでかい図体に似合わず面白いな。

「せ、船長！ どうしましょう!?!」

「え!?! えーと……こうなったら……こいつだあ！」

げっ！ なんじゃあのイカリ！ 10mはあるぞ！ まさかあれ投げる気かい！

「おいどうすんだよ！ あんなの食らったら船なんざ速攻で沈むぞ！
なんかないのか!?!」

「いやいくらなんでもあれは……あ、あれだ!!」
「くらえやあああ!!!」

うおおキタア!! 逃げ逃げ！

「ゴーカイチェンジ！」

「パアートレンジャー!!」

「そんでもって!!」

『クレーン パトライズ 警察ブースト!』

「なんだその腕のゴツいの!?!」

「まあ見てろ！ ストロング撲滅突破あ！」

腕についたクレーンの中からドリルが出てきて、クレーンの先に接続される。

そしてそのままイカリに向かって一気に勢いをつけ、そのまま粉々に破壊した。

「「うっそーん!!!」」

「あ、やべ。ドリルとまんね」

そのままドリルは一直線に船尾につきささり、大きな穴を開けた。そして船はそのまま音を立てて沈んでいった……。

「「「ぎやあああああ!!!」」」

「……南無」

「南無じゃねえヨ！ オマエがやったんだロ！」

「……もうなんでもありだな……」

そうこうしているうちに山が近くなり、そのまま船が一気に上を向き始めた。

船は加速し、そのままジェットコースターが如く一気に急上昇する。

そしていよいよ頂上についた。

「いよいよスタートだ！ しっかり捕まっとけ！」

「言われなくても！」

「ピャー！」

その瞬間、船は真つ逆様に落ちていった。これがこの島でも有名なグランドフオール。

山を水流が駆け上がり、そのまま滝となつて降り注ぐ。

これがデッドエンドレースのスタート。下手をすれば、地面と激突しそのままゲームオーバー。

「「「うおおあああああ!!!」」」

ザッパーン……

「な、なんとか着水できたな……」

「死ぬかと思つた……」

「お前は飛べるから良いだろオウム……」

「オウムじゃねえヨ、パロだヨ……」

って、休んでる暇もなさそうだな……。

「うおおおー！」

「オラア殺してやるー！」「ぎやああー！」

「おおくやってるやってる」

バラバラの支流から海賊が一気に集まり、そのまま乱戦状態。海賊達のレースにルールなんてない。

一斉に潰し合いが始まった。

因みにウチの船の周りは幸いさつき3隻沈めたのが見られていたみたいで、今のところ挑んでくる奴はいない。

とりあえず海流の激しいところはとっとと抜けてしまおう。

あ、巨人族の船が大破してやがる。ラッキー。

「くそっ、サラマンダー号はあんなに遠くに……」

「まあ進んでりやそのうち合流すんだろ」

「オレ、ちよつと中で休ム……」

「おうそうしな」

「さてと、俺は見張り続けっからお前も休んでいいよ？」

「むしろお前が休めよ。ほぼずつと戦いっぱなしだったろ」

「交代で見張れば良いでしょ」

「ビヤアアアア!!」

「な、なんだ!?! あのオウムか!?!」

「中で何かあったのか?」

二人で船の中に入ると、小さな子供がパロを掴んで銃口を向けていた。

でかい帽子をかぶっていて、なんか生意気そうな顔をしている。

「おい、動くな！ 動いたらこいつを撃つぞ！」

「子供……？ いつの間に乗れ込んでいたんだ？」

昨日紛れ込んだできたのか？ またいつのまに……。

「おい、聞いてんのか！ 撃つって言うてるだろ！」

「え、良いよ別に」

「え？」

「オイコラ！ いい訳ないだろ!!」

「お、おい？ あの鳥仲間じゃねえのかよ？」

「良いよ別にあんな穀潰し。煮るなり焼くなり親子丼にするなりご自由どうぞ」

「ぶっ殺されたいのかオイ！」

ウルセエ！ 捕まってる分際でガタガタ抜かすな！

全くこないだも捕まってたのに、良い加減にしろよ！

「お前ら！ 本当に撃つぞ！ お前も喋ってないで……」

え？ 喋った？ こいつ喋ったぞ!？」

「いやおせえよ」

「え、なんだよこの鳥気持ち悪りい！」

「なんだとこのヤロウ！」

あ、手エ離れた。アホだこの子。

「はい確保」

「わっ、離せ！ 離せよ！」

「そんな危なっかしいもん持って、君一体どっから入ってきたんだ？」

「ウルセエ！ お前らに関係ないだろ！」

いや関係ありありだよ。こっち襲われた張本人なんだけども。

第一こんな子供がこんなところによく一人で忍び込めたな。

「まあいいや、何しにきたの？ これ一応海賊船だよ？」

「黙れ！ 金がいるんだ！ お前らを殺して、金を作るために来たん

だ！」

「金ねえ……わかりやすくいいや」

つつても俺まだ懸賞金かけられてないけどね。絶対乗る船間違えたなこの子。

「くそっ……殺せよ！」

「はあ？」

「生きてたってしょうがないんだ……希望だつてない……だからとつとと……」

「……」

その瞬間、シユライヤは思わず息を呑んだ。パロも思わず冷や汗を流した。

ソレほどまでに、アカが発した気迫が凄まじかったのだ。

「殺さねえよ。お前には殺す価値もねえ」

「なっ……」

「いいか、一つ教えといてやる。」

弱い奴は、死に方も選べねえ」

そういうと、アカは銃を持って外に出ていった。

子供は思わず涙を流した。自分が乗った船は間違いなく海賊の船。自分が思っていたよりも、ずっと恐ろしい海賊の船だったのだ。

「意外だな、お前もつとお人好しな奴だと持ってたぜ」

シユライヤか。できれば外で一人になりたかったんだけどね。

「そんなんじゃないよ。ただ、ああいう命知らずのガキは、あんまり好きじゃねえんだ」

「……そうかよ。まあお前もなんかあつた口みたいだな」

ま、確かに色々あったよ。俺も転生前の記憶を思い出すまで、結構荒れてたからな。

「まあいいや、飯作るよ。見張りよろしく」

「……ああ」

「お頭！ もうこの船はもうダメだ！ 逃げよう！」

「なんでこんなことに……」

「お頭！」

「ここは、ゴールのパーティアじゃなかったのかよ!!!!」

その叫びを最後に、船が一隻また沈んでいく。

参加した海賊たちはなぜか、次々にやられていく。

そしてガスパーデは、その断末魔を想像しながら、一人ほくそ笑んでいた。

第5話 嵐の前兆

「なっ……なんじゃこりゃあ……」

どうもアカです。ゴールに向けて船を進めていると、なんだか沈んだ船が

いっぱい見えてきたもんなんで、乱戦でもあったのかなと思ってました。

と、思っていたらなんか目の前にえらいもんが見えてきます。

あれ、なんか海軍のマークが見えるんですけど……気のせいだよな？

「なんで目の前に海軍要塞が……？」

「一体どうなってるんだ……？」

「多分、こういうことだよ。ここの金具、とってみろ」

そう言っつてパロが持つてきたのは、レース開始前に胴元からもらったエターナルポース。

言われた通りにゴークアイサーベルで地名の書いてある金具の部分を外してみた。

そこには「パルティア」じゃなくて「ナバロン」と書いてある。

「おい、ナバロンって確か……」

「有名な海軍の基地だ。通称「鉄壁の要塞」って言われてる」

「ガスパーデだな……こんなことするのは、きつとあいつだ」

ガスパーデ……あのデコ助、こんなことまでやってるっていうのか？

でも何のために？

「そうだと思うよ。ついこないだ船で、大量のエターナルポースが積まれてるのを見た。多分、それ」

「オマエ、ガスパーデの船にいたのか？」

「うん、昔助けてくれたじっちゃんやんが、船で働かされてた……」

病気なんだ。仲間じゃないってあいつら、薬もくれない。

だから、おれ……」

「ま、きみ前の事情はわかった。で、どうする?」

「え……?」

「ここは海軍の基地だ。ここで降りれば君は助けてもらえる。海賊船とはお別れだ。」

その代わり、おじいさんとも会えなくなる」

「うっ……」

ちよつと厳しいかもしれないが事実だ。正直、これ以上この子を船に乗せているわけにもいかない。いくらなんでも危険すぎる。

「もしいかなんなら、俺は今からガスパーデのところに行くけど、君はどうする?」

「行く! 連れてけ!」

よし、その啖呵やよし。んじや行きますか!

ガスパーデぶっ飛ばしに!

「……ってどうやっていくんだよ。パーティアがどこにあるかもわからないんだぞ。」

エターナルポースもないし……」

「ま、方法がないわけでもない。ゴーカイチェンジ!」

「ジューウオウジャー!!」

ちよつと考えたけど、ジューウオウイーグルの視力が一番可能性がある。結構雲が濃くて薄暗いからうまくいくかな……んん?

結構雲が濃くて薄暗いからうまくいくかな……んん?

「くそっ、あの賞金稼ぎと小僧のおかげで、釜炊きに格下げタア……」

「ああもうやってられるか!」

「お主ら、何をしておる……? 誰の許可もらってボイラーに飯やってんだ!」

「ウルセエな、好きでやってねえよ！」

「アナグマはどこに行った？」

「アナグマ？ ああお前の助手だったか？ 確か、海賊を殺しに行つたとか何とか……」

「なんだと!?!」

いやあ、サラマンダー号見つかって良かった。正直結構ダメ元だった部分あったからなく。

あ、アナグマのやつ、パロと一緒に寝てやがる。こうしてみると、結構可愛いのに、

まあ海賊船で育つたらあんな風にもなるか。

「おい、見張りご苦労。なんか食つとけよ」

「ああ、悪いな」

そんでコイツはガスパーデの船見つけてから一睡もしてないな。流石に少し休んどかないと、出会った時体力もたんだろうに。変に頑固なんだから。

「なあ、少し聞いてもいいか？」

「……なんだ？」

「ガスパーデと、何があつたんだ？」

デリカシーがないかもしれない。でも、やっぱりずっと気になつていた。

ただの賞金稼ぎのためとか、そういうあれではないのは間違いないし、コイツも

俺がそれに気づいている事は、薄々勘付いてると思つた。

「……お前には関係ないだろ」

「かもな、でも気になつちつてよ」

「……まあ。単純な話だ。お前の思つてる通り、賞金とかが目当て

じゃねえよ。

「俺はあいつに復讐するためにここにいるんだ」

復讐ねえ……あの目はやっぱりそういう事だったか。

「俺の生まれは造船所があった。親は船大工だった。」

小さい頃、蒸気船が珍しくて見に行つたことがあった。

だがその日、ガスパードがそれに目をつけて、奪いにきた。

ついでみたいに、故郷を火の海にした。

その時まだ3歳だった妹は、川に流されて死んじまった。

家族も、友達も、みんなあいつに奪われた。

だから……あいつだけは、俺の手で討たなくちゃならねえんだ」

……思つた以上に重たい話だった。

だが、聞いたことを後悔はしなかった。

持つていた酒瓶に、思わず力がこもる。

「聞かない方が良かったか？」

「いや、酒の肴にはなつたよ」

「はっ、そうかよ」

「……くだらねえと思うか？ 復讐なんて」

「は？」

「俺はあいつを殺すために、なんでもやって来た。

騙し、殺し……あげたらキリがねえ。

きつともう、元には戻れねえだろうな」

「……俺が昔聞いた言葉でこんなのがあるんだけど、

とある、自分の姉を殺した犯人を殺すためにわざと捕まって、刑務

所に入った人がさ

こんなこと言つてたんだよ。

『「復讐」とは自分の運命への決着をつけるためにあるッ！』

……だつてさ」

前世の兄貴の受け売りだけどね。第9部ちゃんと読みたかつた

なあ……。

「だから、くだらないなんておもわねえよ。

お前は何も間違つちやいねえよ」

「運命への決着……か……」

「ああ、それに、乗り掛かった船だ。最後までとことん付き合うよ。

あ、船に乗ってんのはお前か。なはは」

「へっ、物好きいな奴だ」

「んだとお、飯下げるぞこの野郎」

「おいやめろ、食うよ食う食う」

いつのまにか夜は過ぎて、俺たちはただただ笑い合っていた。

利用とかが復讐とか……そんなしがらみは忘れて、ただただ、普通の友達みたいに。

「……これうまいな」

「だろ、俺特製手羽先だぜ」

「……暇だ」

「ぐっ……」

悔しそうに顔を歪ませるのは、優勝候補2番手、魚人海賊団船長ウイリー。

いや、すでに彼は船長ですらない。なぜなら彼の一味は彼を残して、全て殺されてしまい、船の上で無惨な姿で散らばっているためだ。

それもたった2人、ガスパーデとニードルスに還付なきまでに壊滅させられていたのだ。

レース途中、ウイリーは他の海賊船のグループから離れたサラマンダー号を怪しみ追いかけたが、

そのまま戦闘になり、船員はおろか船まで全て壊されてしまったのだ。

全く歯が立たなかった。魚人と人間の種族の差だとか、そんな小さな問題ではない。

海賊としての、格の違いを思い知らされたのだ。

「少しは暇つぶしになると思ったが、これじゃおもちゃにもなりやしねえ。つまらない奴は、とつとと俺の前から消え失せろ！」

そう叫ぶとガスパーデはウイリーの頭を掴み、海に向けて放り投げた。まるで気に入らないおもちゃに癩癩を起こす赤ん坊のように、彼のイライラは最高潮に来ていた。

「それとも……お前が遊んでくれるか？」

そう言つて彼が見たのは、自分の手下であるはずのニードルス。側から見れば、寡黙で冷静なガスパーデの右腕だが、彼の目的は、彼を近くから観察し弱点を見つけ、自らの手で殺すこと。

ガスパーデもそれは承知の上で、むしろ殺して見せろと言わんばかりに彼を近くに置いてしている。その奇妙で狂った関係を見て、船員達は思わず身震いした。

すると1人の船員から大声が上がった。

「ガスパーデ様！ 船が一隻こちらに向かっています!!」

「どいつだ！」

「いえ、見たことのない船です！ 船体が全部真っ赤で、2人しか乗っていません！」

「真っ赤……？」

その言葉にガスパーデは、思わず反応した。

間違いない。スタート前啖呵を切ってみせた、あの生意気な小僧。ニードルスの速さを見切り、宣戦布告してみせた命知らず。

やつときたかと言わんばかりに、彼の口角はにんまりと上がっている。

さつきまで癩癩を起こしていたかと思えば、新しいおもちゃを見つけてうずうずするガスパーデを、ニードルスはただ静かに眺めていた。

風が強くなる。嵐の予兆だ。

この嵐が過ぎ去った後には、いったい何が残るのか、誰が立っている。

るのか。

それを知るものは、まだ誰もいない。
だが、そのうねりの中心にいるのは

「おおーい、アゴデカ將軍!!遊ぼうぜえ!!!」

…間違いなくこの男である。

第6話 Substitution

「お前、何を叫んでんだよ！ あいつの怒り買う気か！」

「え、もう買ってんじゃん。だったら逆にあいつの冷静さを奪うためにや……」

「余計に怒らせるだけだろ、どう考えても！」

「おいお前ら、ケンカしてる場合かよ！」

どうもアカです。ようやくサラマンダー号に追いつきました。

遂にガスパーデと対決かと思ったら、船の上でシユライヤに怒られています。ごめんて。

ほらアナグマも止めてるしき、ね？

てことでガレオンのイカりを降ろして、お船にじよーせーん！ あよいしょー。

「おうお前ら、あの時は世話になったな!!」

「今度は覚悟しろよ！ 数が違うんだよ！ 数が！」

「たかが2人に何ができる！」

うわっ、なんかいっぱいいる。ハンニバルで見たのもちらほらいるな。この数はちよーつと骨が折れそうだ。だけどシユライヤはそんな奴ら見向きもせず、どっかから持ってきたスコップを握りしめながらガスパーデとニードルスの方しか睨んでいない。まあそりやそうか。

そんでアナグマ、ズボン引つ張りすぎ。落ちちやうでしょ。

「よし、アナグマ。とりあえず俺らで隙を作るから、その隙にパロと一緒にお爺さん見つけてきな。」

見た感じそれっぽい人いないから、ボイラー室でしょ」

「う、うん。でも大丈夫か？ あの2人だけでも大変なのに、下っ端もあんなに……」

「どのみち君に今できるのはここで戦うことじゃない。合図したら、一気に飛び出すんだ。」

パロ、頼んだぞ」

「オウ！」

そもそもこの子がここにいるても、正直足手まどいだ。2人で守りながら戦えば間違いなく負ける。

だったらこっちの方が都合がいい。ちよつと言いは悪いが事実だ。

「で、役割分担はどうしよつか？」

「……あの2人は俺がやる。それだけは譲れねえ」

「そ。じゃ俺はこいつらかな」

「1人でやる気か？ 随分な自信だな。やられんなよ」

「確かに厳しいかもしれないけど、やるだけやるさ」

そして俺たちは背中合わせかつ小声で、互いの獲物を定める。と言つても、シュライヤの目的は最初から目の前の2人。流石にあいつらを相手にするのはシュライヤでも厳しいだろうが、あいつらの性格上、2人同時になぶり殺しにするということはない。

だったらこいつが戦っている間、この雑魚たちが邪魔しないようにするのが俺の役目だ。

「んだとお！ ガスパーデ海賊団は、てっぺん2人だけじゃねえぞ！

やっちまええ！」

「「「うおおお!!!!」」」

1人の合図を皮切りに、一気に海賊が攻めてくる。数が多いからなんだ。

こつから先は一步も踏み入れさせない。あいつの邪魔をさせるわけにはいかない。

「ゴーカイチェンジ！」

「ゴオーカイジャー!!」

「行くぞ！」

その合図を皮切りに、俺たちは3手に別れて走り出した。

アナグマはパロと一緒にボイラー室に向かって走り出した。まだ

海賊達がくる前に下の階に行けば爺さんを見つけられる。

シユライヤはガスパーデとニードルスに向かつて一気に進み出した。おそらく先に来るのはニードルス、勝てるかどうかは賭けだが、長引けば1人で戦うのが厳しい。

だから俺は、その時間を少しでも稼ぐ！

「おらあ！」

「くそつ、こいつやっぱ強い！」

「だったらなんだ！ たった1人なんだぞ！」

「どんだけわいてくんだよテメエら、1匹みたら30匹いんのか!？」

「2人をGみたいにないな!!」

ああもう数が多い。ハンニバルの時の比じゃない、下っ端全員引つ張り出てきやがったなこいつら。カツコつけたのはいいけど、このままじゃあいつのところを辿り着かれるのは時間の問題じゃなかよ。どこぞのお猿の船長みたいに「ゴムゴムの鞭!」とか言つて一掃できればどれだけ楽か……ん？ お猿？

「そうだ！ こいつを試してみよう！ ゴーカイチェンジ！」

「カークレンジャー!!」

「姿が変わったからなんだ！ 一気に畳みかけろ！ くらえ！」

「ぐはっ!!」

「よっしやあ！ ついに倒した……ぞ……?」

「うわあ、こいつ増えたぞ！」

「まさか、分身の術か!?!」

「な、なんだこいつ!? 忍者なのか!？」

「2222へっへーん、隠流・分け身の術だ!!」

カクレンジャーの必殺技 隠流・分け身の術。攻撃を受けたふりをして、最大8人まで分身する技である。この人数差を覆すには、これしかない。

てか何人が目え輝かせてんなあ。やっぱワンピース世界でも忍者

大人気なんだな。ローヤゾロですら興奮してたもんな、そりやそうか。

原作ではない戦い方だ。使ったらどうなるかわからない。だけど後のことを考えてたら、きつとこいつらを倒しきりことはできない。やってやるぞ、ちくしょう！

「そんなもっていくぜ！ みんな！」

「「「「おう！ ゴーカイチェンジ！」「」「」」

「ゴオーレンジャー！！」

「ジューウレンジャー！！」

「ガーオレンジャー！！」

「マージレンジャー！！」

「デーカレンジャー！！」

「シーンケンジャー！！」

「キーラメイジャー！！」

昔ベ○100っていうアニメで分身した後別々の姿に変身する話があったから真似してみたけど、なんとか成功した。でもこれ、戻った後どうなるか俺にも想像がつかない。正直賭けである。

「こ、こいつ、いやこいつら何しやがった!？」

「1人だろうが8人だろうが知るか！ 人数はこっちの方が多いんだぞ！」

「でもあいつ1人でも強いんだぞ！ それが8人って……」

「ここで逃げたらどのみちガスパーデ様に殺されるぞ！ いけ！」

「「「「「さあ、派手にいくぜ!!」「」「」「」」

「ふっふっふっ、あいつら、派手にやってるな」

「……」

シユライヤはスコップに力を込めながら2人を睨む。

目の前にいるのは、自分の故郷を焼き、家族を殺し、全てを奪った男達。

遂に、遂にここまで来た。

あいつは、俺の復讐を否定しなかった。

利用されていたことを知っても、あいつは手伝うと言った。

ただのお人好しかももしれない。それでも、自分を信じてくれたアカのために、

そして、自分自身の運命のために。

「いくぞ……ガスパーデ……」

「ふっ、いいだろう……といてえ所だったんだが、ニードルスがどうしてもお前を消したいと言っていてな。見物させてもらうぜ」

「どつちが先かってただけだ……テメエも標的の1人だ！」

そう言うのと2人は一気に接近し武器をぶつけ合った。鉤爪とスコップは互いに火花を散らし、縦横無尽に動き回る。互いに素早い動きを武器にするタイプということもあって立体的に飛び回りながら相手を攻撃する。しかしシュライヤに比べてニードルスの方が経験値と腕力が幾分か上である分、シュライヤは防戦一方。ニードルスは自分たちの船のことなどお構いなしに攻撃する。すでに数発もらったシュライヤの体はボロボロだが、船もあちこち穴だらけになっただけなく。

「おい、船を壊すんじゃないよ」

そんなガスパーデの声も虚しく、船はどんどん壊れていく。そもそも元々ガスパーデの船でもないわけだが。そうしているうちに、ニードルスの剛腕がシュライヤを襲い、床に叩きつける。

「がはっ……！」

だが次の瞬間ニードルスの顔が歪み、シュライヤを蹴り飛ばし距離を作る。気がつくのと右腕の骨が折れ、感覚が無くなっていた。

「へっ、まず一本……」

「ボイラー室はこっちだ！」

「あとどれくらいだ！ 時間あんまりないぞ！」

「もう少し！」

アナグマとパロはボイラー室に向かって走る。すでにほとんどの船員は戦闘に出ているため、船内には人が今の所見当たらない。上から聞こえる音からして、かなり激しく闘っているのが伝わる。下手をすれば船ごと沈む可能性もある。それを考えると、自然と足が早く動いた。

「……ん？ 誰じゃ？」

「あ、じっちゃん！」

「お、おめえアナグマか！ 今まで一体……!?」

「じっちゃん!! じっちゃん！」

「バカモンが……無事でよかった……」

「ごめんよじっちゃん……」

「オイ、感動の再会は一旦後回しにしろ！」

「そうだ、じっちゃん！ 急いでこのふねをでよう！」

「え、なんじゃと？ と言うかその鳥喋つたらんか？」

状況が掴めずあたふたするビエラの腕を掴み、アナグマは出よう出ようと急かす。一体何があったと、ビエラはただただ焦る一方である。

「今上で俺が乗せてもらってる船の海賊と賞金稼ぎがガスパーデ達と闘ってるんだ！ あいつら強いんだ、きつと助かるよ！ だからここを出よう！ 生きるんだ！ じっちゃんいっつも言ってたじゃんか！」

「あ、ああ……、そいつらは一体……？」

「来てよ！ 見ればきつとわかるよ！」

「あつ、おい!？」

アナグマに引つ張られ船上に出たビエラが見たのは、ニードルスと戦うとある青年だった。8年前、自分がいた島で見た覚えのある顔。その男を見て、ビエラはパロに聞いた。

「お、おい。あの黄色い服の男の名は!？」

「エ!？ えつと、シユライヤ・バスクードだけど……」

「……つ！」

その名前を聞いた瞬間、ビエラの顔が変わった。何かを決意したような、緊張感のある顔だった。アナグマも長い付き合いで始めてみる顔だ。

「アナグマ、お前は先に戻ってくれ」

「え、じつちゃんは？」

「ワシはやることのできた。なあに、すぐに追いかけるわい」

「でもお……」

「頼む、このおいぼれの後生の頼みだ」

「……わかった」

「鳥さんや、この子をどうか頼めるか？」

「ソ、ソレはできるけど……、アンタ、まさか……」

「何も言うな。どうか宜しく……」

「オ、オウ……」

ビエラの真剣な顔つきに、アナグマもパロも思わずたじろいた。強い決意をしたその声に、自分も応えねばと思ったからだ。もしかしたらビエラはかなり危険なことをする気なのかもしれない。下手をすれば死ぬかもしれない。それでも「わかった」としか答えられないと言わざるを得ない凄みだった。

「行こう、オレたちはアイツらが勝った後すぐに帰れるよう準備しないトー！」

「え、どういうこと!？」

「あれを見ろ！ ハンニバルで小耳に挟んでたんだ！ この辺は……」

サイクロンの名所だ!!」

「んな——!!??」

「はあ……。いい加減くたばれよ……」

「……」

もうどれだけ撃ち合い、殴り合ったかもわからない。そう思うほど、ニードルスとシュライヤの戦いは均衡していた。腕一本折れた

ニードルスと、全身打撲のシユライヤ。外輪の上でどちらがいつ倒れても、全く不思議ではなかった。

「あの男は俺が殺す……。渡さん……」

「変態野郎が……」

再び2人は動き出す。思い切り振り上げられたニードルスの左腕をシユライヤが反射的にスコップでガードするが、ニードルスの腕力はそれをものともせず、そのまま脳天に一撃を打ち込み、シユライヤは気絶してしまう。そしてニードルスは終わりと云わんばかりに、鉤爪を振りかぶり、シユライヤに振り下ろす。

「トドメだー!」

だがそこでニードルスにとって誤算があった。一つはシユライヤにはまだ意識があつたこと。

鉤爪が刺さる前に、シユライヤは横に転がり、ギリギリで攻撃を避けた。そのまま鉤爪は外輪に巻き込まれ、ニードルスを腕ごと引き摺り込もうとする。思わず焦ったニードルスは鉤爪を外し、一息つく。

だがそこでもう一つの誤算が起きる。それはシユライヤの予想外の一撃。普段の冷静な自分なら躲せていた攻撃だが、さしもの彼でも死の恐怖には勝てなかつたようで、そのまま攻撃をモロに受け、海に落ちていった。誰よりも冷徹な海賊の人生は、あまりの滑稽に幕を閉じた。

ついに1人復讐の相手を仕留めたシユライヤは息を整え、ガスパーデにスコップを向ける。すでに体はボロボロだが、ニードルスを仕留めたことで彼自身無意識のうちに興奮していた。今しかない。今こそ、奴に一矢報いる時だと自分に言い聞かせる。当のガスパーデはただニヤつきながらこちらを見つめている。余裕綽々と言う表情だが、そんなものは関係ない。

「次はテメエだ!! ガスパーデ!!!」

勢いのままにスコップをガスパーデの顔面に振り下ろす。だがその瞬間、シユライヤは絶望する。なんとガスパーデの顔は緑色の水飴のようになっており、スコップで裂けた顔はまるでハエでも止まっているかのようにはまっている。シユライヤにはまるで悪魔の微笑みの

ように見えた。8年越しに喰らわせたと思った一撃は、血の一滴すら流させることはできなかった。

「ニードルスをやったのは見事だったが残念だったな……。俺は昔、アメアメの実っていう悪魔の実を食った。その能力は、体を水飴のように変化させること。溶ければあらゆる攻撃をいなす最強の盾のなり、固まれば……」

「ぐはっ！」

「こうして相手を殺す最強と矛にもなるのさ」

拳を硬質化した飴にした一撃はシュライヤの腹を直撃する。そのあまりにも重い一撃に、シュライヤの意識は飛びかける。一気に近づいたことで間合いが縮まっていたことで、ガスパーデの強力なカウンターを食らったのだ。肋骨の2, 3本は折れているだろう。だがシュライヤの執念がなんとか意識を保たせた。

「ほお、まだ意識があるのか。だがこれはどうだ！」

シュライヤと言うおもちゃが一撃で壊れないことに気づき、目を輝かせるガスパーデ。

首根っこを掴んだまま一気に拳を振り上げ、そのまま顔面に振り下ろす……

だがその拳は突如2人の間に現れたサーベルによって防がれる。

鉄の如く固まった拳とサーベルのぶつかった金属音に近い音が、雨の中響き渡った。

サーベルの持ち主は赤いコートを靡かせ、ニヒルに微笑む。それに返すように、ガスパーデもまた思いつきり口角を上げた。

「選手交代だ」

「テメエ……！」

第7話 友の心が青臭い

「テメエ……まさかあの人数を全部倒してきたのか……!」

「まあね、なんとか全員片付けてきたよ」

「だが、かなりキツイんじゃないか？ 息切れしてるぞ？」

「どうも……アカです。シュライヤにトドメを刺そうとしたガスパーデをギリギリで止めたのはいいんだけど、ガスパーデの言う通り今結構疲れてます。全員倒した後1人に戻ったら、まさか8人分の疲労が一気に体にきちやうとは……。雑魚は片付けられたけど、今日の前の將軍様に勝てるかは正直わからない。て言うか何こいつ、水飴みたいに溶けてんぞ？ 能力者だったのか？」

「まあいい、こいつにも飽きたところだ。次はお前だ!」

「そういうとガスパーデはシュライヤを思い切りぶん投げた。うおい、おもちやじゃねんだぞ少しは丁重に扱えデカブツ將軍!

「お前……サイクロンが迫っているってのに……随分余裕だな……。能力者なんだろう……?」

「なあに問題ねえ。こんな時の為の脱出用のボートがある。ただし一つだけな」

「え、部下の分はなし？ 薄情だねえ……」

「はっ、1人にやられちまうような部下どもなんぞ、今更いらねえよ!」
「あつそ……じゃとつとやりますか!」

くっそのこの野郎、いくら撃っても切っても効きやしねえ。多分カタクリのモチモチに近い能力なんだろうけど、ここまで手応えがないとやりづらい。しかも何発かくらっちまってるし、くそ……! だけどここで負ける訳には……

「くらえ!」

「ゴーカイチェンジ!」

「キョーウリユウジャー!!」

迫ってきた鋭い雨の槍を、ガブリカリバーでなんとか防ぎ、カブリ

ボルバーでガスパーデの喉元に弾を撃つ。が、やはり効く気配はない。こいつマジで強いな。9500万は伊達じゃない。だけど水飴だっていうならこうだ！

「ガブリンチョコ！ ガブテイラ アロメラス！」

「こんがり焼いたらあ！」

「ぐあつ……あつ……効くかあ！」

あつ、くそダメか。でもちよつと焦げてるし、ダメージは入ってるっぽい。次はこれだ！

「ゴーカイチェンジ！」

「アーバレンジャー!!」

「食つちまえ、テイラノロッド!!」

「ぐああ!!!」

よっしゃ、この調子で全部食つちまえ！ っておい吐くなよ！ あいつそんなにまずいのか!?

水飴のくせに!?!? ペロスペローのペロペロとは違うのか!?!?

「くつ……くだらねえ真似してんじゃねえ!!!」

「ぐはっ!!」

がっ……腹に一刺し喰らつちまった……。ダメージがデカすぎる……。ちくしよお……流石にこのままじゃ意識が……。変身も解けちまったし……。このまま終わりか……??

「テメエももう終わりか？ だったらトドメだ！ くらえ！」

「させるかあ！」

「ぶはっ!？」

何が起こったのかわからずガスパーデを見ると、顔面にスコップが刺さってる。スコップが飛んできた方向にはシュライヤが息を切らしながら立っていた。けどももういつ倒れてもおかしくない。足もフラフラだし、息も途切れ途切れだ。

「テメエにもう用はねえ、失せろ！」

「ふぎげんな！ この8年、お前に復讐することだけ考えてきたんだ

！ それをここで諦め切れるか！」

「この野郎……。まだまだ元気じゃねえか。心配して損したぜ……。」

「8年もご苦労だったな、賞金稼ぎ！」

「それだけじゃねえ！ そいつを殺される訳にはいかねえんだ！ ようやく……。腹割って話せた相手ができたんだ！ テメエみたいなやつにやられてたまるか！」

「仲良しごっこなら家に帰ってやんな小僧！」

「うるせえ！ これ以上、テメエには何も奪わせない！」

全部守ってみせる！ 俺のこの手で！」

シユライヤが叫んだ瞬間、俺のバックルが青く光始め、レンジャーキーとモバイレーツがそのままシユライヤの目の前に飛んでいった。まさかあの時みたいに、レンジャーキーがあいつを選んだのか!? てことは……。もしかして!?

「おい、その青いのはなんだ？」

「これは……?。」

シユライヤは思わずその鍵に手を伸ばした。正直空中に浮く鍵なんて何があるかわからない。普通だったら手を伸ばすなんて考えられない。だけど手が自ずと伸びてしまった。

そして鍵に触れた瞬間シユライヤの中に記憶が流れてきた。

それは戦隊達が紡いできた、戦いの記憶。

言葉ではない。はつきりした映像というわけでもない。

それでもその記憶はシユライヤの心の中にはつきりと刻まれた。

言葉では言い表せない感覚が、そのまま体をかけていく。

そして気がつくのと、両手にはモバイレーツとレンジャーキーを握っていた。

「おい……。まさかお前が？」

「いくぜ……」

「ゴークイチェンジ!!」

「ゴオーカイジャー!!」

「おいおい奴ら……船を沈める気か？」

ビエラはそう呟きながらボイラーの開放弁のバルブを回す。自分の息子のように可愛い存在だが、今だけは少し雑に扱わせてもらう。「まあ……わしも似たようなものか。少しの辛抱だ、わしも一緒だからな……」

その言葉を最後に、ボイラーは大爆発を起こし、不熱は真つ二つに破壊された。

ある程度距離をとっていたガレオンはすこし流されただけでダメージこそなかったが、アナグマはその光景に思わず気を失った。

「お、オイ！ ヤベエ、船が離れちまつタ！ エエト舵は……」

げほ……まさか急に船が爆発するとは思わなかった。アナグマが言つてた爺さんがボイラーを爆発させたんだろう。しかしこうも真つ二つだとガスパーデのやつ、海に沈んだんじゃねえか？ それより爆発の前に見たあれは……

「くそつ、この船は結構気に入ってたんだがな……」
げ、ガスパーデ。まだ生きてやがった。しぶといやつだなほんとに。

「まあいい、今度こそくらえ!!」

ガスパーデはこちらを見ると、ここぞとばかりに腕を伸ばして攻撃した。自分が上の方にいるから一気にスピードが出ている。くそつ、流石にガードが間に合わない……。

「させるかよ」

その言葉と共に、一発の弾丸がガスパーデの腕を直撃した。ダメージこそないが、硬質化した腕は弾によって弾け飛び、アカの喉笛に突き刺さるまでには至らなかった。そして弾が飛んできた方向にいた

のは、アカに似た姿の青い戦士。

ゴーカイジャーのゴーカイブルーだった。

「なっ、テメエ！ まさかあの賞金稼ぎか!!?」

「ああ……気がついたら、こうなってたよ」

まさかあの時みたいにも、レンジャーキーがシユライヤを選んだのか？ 何この胸熱展開。正直今マスクの下べしよべしよだよ。でもそんなのお構いなしに、ガスパーデはこつちを始末しようとしてくる。

「だからなんだ、2人まとめて地獄送りだ！」

「「やれるもんならやってみろ!!」

確かに2人になっても、ガスパーデのアメアメの体にゴーカイガンとサーベルの攻撃は通用しない。おまけに向こうはまだそこまで負傷していないけど、こつち2人はもうボロボロだ。せめて何か弱点を見つけないと、ジリ貧もいとこすぎる。下手に剣を突き刺せば、絡め取られて終わりだし。剣と銃撃でやつの伸びる攻撃を受け続けるのも、いつか必ず綻びが来る。せめて何か弱点でも見つけられればいいけど。確か本誌だとクロコダイルのスナスナは水に濡れると固まってダメになる筈だった。向こうにも多分そういう弱点があるはずだ。少なくとも今雨で濡れてるのになんともないから水じゃない。

くそう、せめて何か……。

「おい、何考え込んでんだ！ 少しは弾くの手伝え！」

「へ!? いや、あいつの弱点とか、なんかないかなって！」

「くそっ、雨で体が冷えてきやがった。もう長いこと戦えねえぞ！」

確かにもう俺たちみんな雨の中よくもまあこんな長い間……ん？

冷える？ そうだ！

「おいシユライヤちよつと耳かせ！」

「あっおい！」

頭を無理矢理近づけると俺はシユライヤに作戦を伝える。また賭けになるかもしれないが、そんなの考えて勝てるような相手じゃないのは百も承知だ。やれること全部やらなきゃ絶対勝てない。

「おい、でもお前が囿になるのは……」

「テメエの仇だ。蹴り付けてこい」

「なあにコソコソしてんだあ、俺もまぜろ！」

ガスパーデは腕を一気に伸ばしてパチンコの要領でこっちに飛んでくる。どこぞのゴムゴムみたいなことしやがって。まあ作戦は伝えた。まずは俺が時間を稼がなくては。

「おらこっちだお飾り將軍！　ゴーカイチェンジ！」

「ゲエーキレンジャー!!」

「ゲキワザ、咆哮弾！」

「ぐわっ！　また食ってきやがった！」

「飴なんだろ？　美味しくいただいてこそだろ！」

「ふぎけるんじやねえ！　少しは真面目に戦え！」

「俺はいつだって真面目だぞ！」

「あれでか！」

うわっ、もう振り切りやがった。でもまあ時間は稼げた。今あいつはシュライヤのことは頭から消えてる。やれ！　シュライヤ！

「いくぞ！　ゴーカイチェンジ！」

「リユウソウジャー!!」

「なっ、こいつ！　いつの間に俺の後ろに！　だが、格好が変わったからなんだ！」

「ヒエヒエソウル!!」

「強！」「リユウ！」「ソウ！」「そう！　この感じ！」「ヒエヒエ！」

「くらええ!!」

「ぐはっ！　くっ、きかねえと……がっ！」

「はあ……はあ……よし！」

「くそっ、なぜだ。なぜ背中の剣を絡め取れなかった……？」

シュライヤが変身したのはリユウソウブルー。リユウソウジャーは強竜装と呼ばれるアーマーを身に纏うことで、強力な能力を使うことができる。そしてあいつの今のアーマーは冷凍能力を使える。これを使えば、あいつの飴の体も冷えて溶けられない。

たとえシュライヤが背中から剣を指したとしても、そのままダメーシを与えられるのだ。

「さあ、これでこつちもお前に攻撃が通るって訳だ」

「ふざけるな……俺は懸賞金9500万の將軍ガスパーデだぞ！ 貴様らみたいな名もない奴らに……！」

「何それ自慢？ 戦うのにビビって、あんなこつすい勝ち方しようとした負け犬將軍の分際で？ ぷぷー!!」

「……っ赤いの！ テメエだけは絶対に殺す！」

「いいや、お前はここで終わりだ。ガスパーデ」

「何!？」

「俺たちがお前に、引導を渡す!!」

そういうと俺たちは自分のゴーカイサーベルにゴーカイジャーのキーを、ゴーカイガンにリュウソウジャーのキーをセットする。ガスパーデもそれを見てこつちがキメ技にかかったこちを察し、全身に棘を生やして突進してくる。だがもう冷静ではない彼に勝ち目は無い。

「フアーイナルウェーブ!!!」

「ゴーカイ ブラスト アンド スラッシュ!!!」

「グアアアアア!!」

ティラミーゴとトリケーンのエネルギーをもらに受けたガスパーデだが、向こうも伊達に9500万の賞金首ではない。足の裏に大量に棘を生やし踏ん張っているが、甲板は木材なのでそこまで踏ん張りは効かない。そのままエネルギーに負け、海に向かってホームランよろしく吹っ飛んでいった。

あばよ腐れ將軍。これが敗北だ、味わうがいい。

「はあ……はあ……俺たち……勝ったのか……?」

「ああ、ついにお前は因縁の相手に蹴りつけたのさ」

「そ、そうか……やったぜ……ザマアミロ……」

「あ、おい!？」

やばい2人揃って体がボロボロだ。俺はまだ出血が少ないからなんとか動けるけど、こいつは血を流しすぎてる。くそっ、サイクロンがすぐそこまで来てるってのに……。

「おい、お前さんたち!!」

「んあ……?」

声のする方を見ると身体中に浮き輪をつけた爺さんがこちらに来ていた。なんだそれ新しいフアツション?

「まさかガスパーデを倒しちまうとはな! すごいなお前さんたち!」

「いてえいてえ叩くなこっちは2人とも死にかけなんだぞ」

「ああすまんすまん。つい嬉しくなつてな。お前さんたちがアナグマの言つてた海賊だな」

「まあそうだね……」

「もうサイクロンが目の前じゃ、あの船で早く脱出しよう」

「あの船つて……どの……?」

「アカアアアアア!!」

うおっ、このセツ○ちゃんにも負けない汚い声は……ってあいつこの嵐の中足で器用に舵輪動かして船動かしてやがる! どんな技術だ!
! だけど今はそんなこと言つてる場合じゃねえ!

「うおお爺さん乗り込めええ!!」

「言われんでもおおお!!」

よし全員乗り込んだ、あとはこのサイクロンを脱出するだけだ。う
おおガレオン根性みせんかああああああ!!!
!!!

「……おーい、生きてる?」

「なんとかな……身体中いてえけど……」

「まさか生きて帰れるとは……長生きはするもんじやお……」

「オマエラ感謝しろ……」

空はカラッと日本晴れ。なんとかサイクロン地帯を脱出できた俺たちは甲板でくたばってます。あと一歩で死ぬところだった……。

「……あんた、アナグマの言つてた爺さんか?」

「……そういうお前さんはシュライヤ・バスクードだったか? よく生きとるな」

「まあ、なんとかな」

「お前さん、兄弟はおらんかったか？」

「ああ？　なんだよ急に」

「いやあ、ワシは昔お前さんとある島で見たことがあつてな。造船の盛んな島じゃ」

「ああ……だったらなんだよ？」

「ワシは昔ガスパーデに襲われた時、川からある女の子を助けた。シヨックで記憶は曖昧じゃったが、名前だけはハッキリ覚えておつた。じゃが女の子が海賊に見つかつてはどこぞに売り飛ばされるかもしれない。ワシはその子にアナグマと名付けた」

「だったら……おいジジイ、今なんて!?？」

「名前はアデル・バスクード。間違いなくお前さんの妹じやろう」

　ビエラの爺さんの話を聞いていると、船の中で寝ていたアナグマが出てきた。帽子が取れて長い髪が出てきている。どこから見ても女の子だ。

「アデル……?」

「……おにいちゃん?」

　そう呟いて、2人は思いつきり抱き合つて泣いた。どうやらアナグマもといアデルも気絶した時のシヨックで記憶を取り戻したらしく、シユライヤが兄だと分かつたらしい。2人は俺たちが見ていることなど忘れてただ再開を喜んで言葉もなく泣いていた。

　その後はいろいろあつた。なんとか船を進めるとまさかのデッドエンドレースのゴール地点であるパーティアに到着した。そもそもゴールの方角なんて考えておらず、どこかの島で休めればいいなあなんて話していた矢先についた島がまさかの今回のゴールだったのだ。正直予想外すぎて全員唾然としてしまった。因みに優勝賞金3億ベリーはきちんと頂いたが、せっかくなのでそのうちの1割ぐらいでパアツと宴をやった。

　そんなこんなで3日が経ち、ようやく航海を再開する事にした。だ

けど今までとは、少し違う。

「ほんとに行っちゃうの、お兄ちゃん……」

「ああ……ごめんな、アデル」

なんとシュライヤが俺たちと一緒に行くことになった。流石にアデルのことがあるから来ないもんかと思ったが、ビエラの爺さんに任せるとのことだ。映像電伝虫を買ってあるからいつでも顔を見ることはできるがやはり寂しいだろう。

せっかく妹と再会できたのにいいのかと聞いたが、有名な賞金稼ぎの自分が一緒では海賊に狙われる可能性があると言っていた。

「俺も一緒に行くよ！ 海賊船に乗ってたんだ、なんだってするよ！」
「きみにはまだ危険だよ、もう10年したら、見習いとして乗せてあげるよ」

「土産話どつさり持ってくるから、ここで爺さん止まっててくれ」
「でもお……」

あ、やばい。アデルの泣き顔でちよつと折れかけてる。置いてくつて昨日の夜言つたのお前だろ！ つて、げつ、あれは！

「やばい、海軍の船だ！ 多分ナバロンのやつらだ！」

「やべえ、シュライヤ！ 早く船に乗れ！」

「あ、ああ！」

幸い海軍の船は島の向こう側にある上に、ちようどよく追い風が吹いている。こうなったら一気に出発である。

「アデル！ また必ずくる！ 爺さんにあんまり迷惑かけるなよ！」

「うん！ 絶対連絡くれよ！」

「行ってこい小僧ども！ この子は任せろ！」

「さあ、出航だ!!!」

新たな仲間が1人、俺たちの船に増えた。まさか原作キャラじゃないとは思わなかったが、これから先が楽しみである。てかということの後4人は必要じゃん！ せめて1人は原作キャラ欲しいな。

その頃、海軍本部にて……

「まさかあのガスパーデが討たれるとは……」
「しかも相手は無名の海賊だそうだねえ」
「誰でもかまわん。海賊は根絶やしじゃケエ」